

平成19年度公認会計士試験に 本学現役学生2名が合格!

祝合格

法学部企業法学科4年
小林輝一さん
経済学部国際経済学科3年
木村太一さん

昨年11月、平成19年度公認会計士試験の最終合格者発表が行われ、本学からは小林輝一さん(法学部企業法学科4年)と木村太一さん(経済学部国際経済学科3年)の2名が、現役学生にして見事その難関を突破した。

現在、彼らはすでに会計事務所に籍を置き、それぞれのキャリアパスを築き始めている。大学生と社会人の二足のわらじを履く忙しい日々を縫って、今回は木村さんに合格までの過程や今の気持ちを伺った。

高校時代は部活に専念するなど、ひとつの道に向かって本気で突き進むタイプだと自らを評する木村さん。試験合格を知った瞬間は、舞い上がるほど嬉しいというより、「力が抜けてしまった感じ」というのが正直な心境だったようだ。

木村さんは公認会計士を目指したきっかけを「しっかり学ぶ大学生活を送りたかった。大学入学後に経理研究会に入って勉強し、ファイナンシャルプランナーと簿記3級の資格を取得。その後、さらなるステップアップとして公認会計士を目標に定めて専門学校で学んだ結果、一回の試験で合格することができた」と語る。

巷では、公認会計士試験に合格するために一日10時間の勉強が必要とも言



木村太一さん

公認会計士とは
会計および監査のエキスパートとして、企業をとりまく様々な分野で活躍し、経済社会の基盤を支えるための幅広い業務に携わることが可能となる資格。IT革命や経済のグローバル化に伴い、企業を取り巻く環境が急速に変動する中、活躍のフィールドが急速に広がっている。公認会計士試験の実施は年に二回。4科目の短答式試験と5科目の論文試験で構成され、司法試験や医師国家試験と並ぶ、超難関の国家試験資格だ。

われるが「そんなに集中力は続かないし、迷信では」とさらり。「自分は一日5時間程度、実際の試験を意識して時間との闘いを重視し、ストップウォッチを用いて勉強した。勉強の進め方については一つの理論について、徹底的に突き詰めることが大切。途中で諦めてしまわずに突き詰めることで多様な見方に気付くこともあるのでは」と、彼なりの勉強方法を教えてくれた。

「大学生だったからこそ精神的に落ちていた状態で臨めたのだと思う」と受験当時を振り返る木村さんは、最近ようやく焦燥感から解放されたれ、何かを築いたという気持ちになれたそう。「これからは、実践を通じて確固たるものを積み上げていきたいですね」。

コメントをいただいた木村さん、そして小林さんもそれぞれ、大学生としての時間を充実させながら、公認会計士の卵として実践を積み、次なる目標に向けて頑張っている。これからの彼らの活躍にエールを贈りたい。

Seminar

ゼミナール探訪

社会学部社会文化システム学科

『紙の総合学習を通じた地域間連携』プロジェクト

「五感」で感じるフィールドワークで、 地域と大学を結ぶ!



古紙回収業者の「建場」におけるフィールドワークの様子

白山キャンパスのある文京区は古くから紙産業、特に印刷・製本・出版業が発達している。学校が多く所在することや、この区の特「文教」イメージも紙産業による所以だ。

社会学部社会文化システム学科では、植野弘子教授、長津一史准教授などを中心に2007年度から文京区における紙と地域と環境をめぐる諸問題について、学生たちが地域との交流を図りながらフィールドワークを行う取り組みをスタート。今年度は22名の学生が、紙リサイクルと地域環境についての調査を行う「環境班」と、文京区で印刷業を営む企業に調査を行う「地域誌班」に分かれて活動を行った。

「地域誌班」の中村幸子さん(3年)は、「デジタル化が進む中での印刷会社の苦勞が伝わった。家族経営の小さい企業と、比較的大手の企業との違いも目の辺りにしたが、厳しい状況の中でも地域に根付き、強い誇りを持っていると感じた」、「環境班」の小瀬澤杏さん(3年)は、「古紙再生工場の現場に足を踏み入れた瞬間、リアルな姿が目に見え、飛び込んだ。飛び散る汗、油、匂い……。インターネットや本では決して

知り得ない、生きた情報と触れ合えた」と語る。メンバーは取材対象の設定や連絡、聞き取り調査など、慣れない事柄にとまどったようだが、歩き、見て、聞いた数ヶ月間は、紙産業や地域環境への理解を深めると同時に、地域の人々の思いやフィールドワークが持つ意味合いまでも体感したようだ。

12月にはそれらの活動の集大成ともいえるシンポジウム『紙と地域と環境を考えるー文京区を基点とする臨地教育の試み』を開催した。地域の方々を迎え、フィールドワークの成果を発表したこのシンポジウムは、白山の地に根をおろす本学と地域に新たな絆を生んだといつてよいだろう。

植野教授は「紙と環境」をめぐる問題は地球規模の広がりを持つ課題。地域社会との連携を生みながら、身近な環境問題から幅広く視野を広げて欲しい。今後とも取り組みを継続し、将来は区内の小中高校とともに、環境教育や地域連携を進めていく役割も担えればいいですね」とプロジェクトの展望を描く。



緊張したシンポジウムも、盛会のうちに終了。報告者の集合写真